

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：21601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25862137

研究課題名(和文) 婦人科がん術後患者の回復期におけるフォローアップ相談の開発と効果検証の研究

研究課題名(英文) Study of development and the effect inspection of the follow-up consultation in the convalescence of the gynecologic cancer postoperative patient

研究代表者

井上 水絵 (Inoue, Mizue)

福島県立医科大学・看護学部・講師

研究者番号：20582571

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)： 婦人科がん術後患者の生活への再適応を促進する看護支援を検討することを目的に、フォローアップ相談の開発及び効果検証を行った。文献検討の結果を元にフォローアップ相談を実施した。対象は、研究の同意を得られた婦人科がん術後患者でDropoutをのぞいた非対称群16名、対照群17名を分析対象とした。

対照群には平均3.2回、平均時間20.8分の相談を実施した。相談内容は排尿障害が一番多く、次いで性機能障害、下肢浮腫だった。ベースラインと6ヶ月後のFACT-G及び、HADSのt検定を実施した。結果、介入群の下位尺度、家族・社会(p<0.05)とHADS不安p<0.05)に有意差が認められた。

研究成果の概要(英文)： For the purpose of examining nursing support to promote readaptation to the life of the gynecologic cancer postoperative patient, we conducted development of the follow-up consultation and effect inspection. follow-up talked about results of the literature examination with the cause. The subject assumed 16 non-symmetric group except Dropout, control group 17 analysis subject in gynecologic cancer postoperative patients obtained the study's consent.

We talked about 20.8 minutes with the control group in an average of 3.2 times, a mean duration. The consultation contents had most dysuria followed by were sexual dysfunction, oedema lower limb. We performed a t test of baseline and FACT-G six months later and HADS. A significant difference was found in results, lower standard of the intervention group, family, society (p<0.05) and HADS anxiety p<0.05).

研究分野：がん看護

キーワード：婦人科がん 術後 フォローアップ

## 1. 研究開始当初の背景

子宮頸がん、子宮体がん、卵巣がんの婦人科がん治療は病期に応じ手術療法を実施し、補助療法として化学療法、放射線療法が選択されるが、術後のリンパ浮腫、排泄障害、性機能障害等の合併症や臓器喪失感、化学療法後の脱毛等、何らかの身体・心理上の影響が認められる。そのなかで抑うつは女性のがん患者に多く、がん患者の30～40%に合併すると報告されている(保坂 2001) 一方、患者からの相談は0.3～3%と低い。

がんに伴う抑うつは、身体症状の出現、悪化、苦痛が原因とされ(小澤 2000)、不定愁訴、排尿排便障害、配偶者との関係性の悪化が抑うつ傾向を 増強していると報告されている(前田 2005)。しかしながら、精神状態はがん罹患に伴う正常範囲の反応と判断され(恒藤 1999)その結果、相談機会が得られず、経過に応じた対応がなされないことより QOL を著しく低下させていると推察される。

研究者は婦人科がん術後患者の QOL と影響要因について110名(平均52.4歳)を対象にがん特異的 QOL 尺度(FACT-G)を用いて明らかにしたところ、手術により高率で性機能障害、排尿障害を有し、QOL は配偶者・パートナーの有無、排泄障害の有無、経済問題、社会役割変化、更年期症状、抑うつ、夫婦関係、ソーシャルサポートと関連があり、特にソーシャルサポートが QOL に肯定的な影響、抑うつが QOL に否定的な影響を及ぼしていた(井上.日本がん看護学会誌.第26巻3号)。これらより、婦人科がん術後患者は機能障害と心理的マイナートラブルが認められ、QOL を低下させると考えられる。

これまで、がん患者の退院後の介入研究は消化器がん患者・家族に対して社会復帰を促進する看護援助モデルの開発がされているが(浅野 2005)効果は明らかにされておらず、婦人科がんにおいては継続看護に関する研究は取り組みがされていない。術後の合併症が羞恥心に影響し実態がほとんど解明されていないからこそ、 包括的且つ積極的な看護職者の関与と相談機能が重要になる。

今後、検診受療率の改善に伴い婦人科がん患者数の増加が予測されるが、現在の集学的治療は担当診療科、化学療法、放射線療法と細分化されており、術後、

継続的且つ身体・心理症状における課題を包括的に把握し解決策へ導く相談機会の保証は、看護支援における重要な取り組みである。これらより、回復期における婦人科がん術後患者の特有の課題に焦点を当て身体・心理・社会的な影響を明らかにし円滑な 生活への再適応を促進し QOL を向上するため、専門的な知識を持ち心身のマイナートラブルに対する具体的且つ的確な解決を導く相談機会、つまりフォローアップ相談は必要不可欠と考える。

## 2. 研究の目的

婦人科がん術後患者の回復過程において、これまで申請者が明らかにした QOL の関連 要因調査を基盤に、身体・心理・社会的障壁を改善し生活への再適応を促進する看護支援を検討することを目的にフォローアップ相談の介入比較検討を用いた前向き調査による効果検証を行った。

## 3. 研究の方法

### I. 文献検討：フォローアップ相談の内容の検討

#### (1) 文献等の活用によるエビデンスの構築を重ね、フォローアップ相談案を作成した。

- 目的：国内外のがん患者支援に関するエビデンスに基づいたモデルを参考に、婦人科がん術後患者に効果的な 看護支援の時期と内容を検討した。

- 方法：

- 1) 国内外の看護支援・カウンセリングに関する文献収集、システムレビュー

婦人科がん術後患者の困難(身体、心理、機能、社会のマイナートラブル)及びサポート

婦人科がん術後患者への外来看護の現状について、婦人科がん術後患者の体験を明らかにした質的研究を検索(過去10年間、keywords: 子宮頸、体、卵巣、がん、QOL、抑うつ、機能障害、困難、相談、看護)し抽出。

- 2) 有効性・活用方法・内容等の検討

\* 作成にあたってはがん看護研

究者の助言や情報収集をもとに検討した。

- (2) 検討した相談案の妥当性についてプレテスト。
- (3) 本調査として介入群・非介入群に分類し、介入プロトコルを用いて比較検討調査を行った。
  - ・ 目的：フォローアップ相談による効果について実態調査を行った。
  - ・ 対象：初発婦人科がん術後補助療法を行う患者 42 名
  - ・ 場所：A 県 B 大学病院、婦人科腫瘍科外来
  - ・ 期間 2016 年 4 月~2016 年 10 月
  - ・ 方法
    - 1) 退院直後にベースライン調査を実施し、介入群、対照群に分類する。
    - 2) 介入群に対し、3 ヶ月・6 ヶ月時点でフォローアップ相談を行う。
    - 3) ベースライン調査から 6 ヶ月後後における実態調査を行う。
  - ・ 内容
    - 1) ベースライン・6 ヶ月後の実態調査では、フォローアップ相談案のプレテストで用いた調査項目を使用する。
    - 2) フォローアップ相談案 は症状に対する対処や相談とする。
- (4) 調査結果を統計学的に分析し、フォローアップ相談介入の効果を検証した。
  - ・ 目的：婦人科がん術後患者の QOL、身体・心理に影響を及ぼす要因と介入効果を検証した。
  - ・ 方法：調査結果の経時的変化、介入群と対照群の比較検討を行った。

#### 4. 研究成果

本研究は、婦人科がん術後患者の回復過程において、身体・心理・社会的障壁を改善し生活への再適応を促進する看護支援を検討することを目的に、フォローアップ相談の開発及び効果検証をすることであった。

平成 28 年度は、「婦人科がん術後患者の外来フォローアップ相談に向けた文献検討」~術後のフォローアップに関する和文献検討~、の学会誌発表(研究 1)と、「初発婦人科がん術後患者の初回外来時の QOL と抑うつの実態」~FACT-G,HADS を用いた調査~、の(研究 2) 成果発表を行った。

研究 1 の文献検討において、後遺症に関する生活障害だけでなく配偶者との関係について不安が多く見られていた。加えて介入研究の現状より、婦人科がん術後患者特有の課題を詳細に分析し、婦人科がん治療後の後遺症や症状に特化した介入研究が必要であると考えられた。

婦人科がん術後患者は、身体・心理面、機能面、社会面において経時的に相談内容は変化すると予測される。包括的に情報収集し対話の時間を十分にとり対応することが重要であり、フォローアップ体制についても検討する必要があることが示唆された。

研究 1 を元にフォローアップ相談の介入効果の検討を行った。

基本属性：対象の平均年齢は 55.7 歳 ±14.9)。疾患別では子宮頸がんが 15 名 (35.7%)、子宮体がんが 12 名 (28.6%)、卵巣がんが 13 名 (31.0%)、その他 2 名 (4.7%) であった。PS は 0~1 が約 7 割を占めていた。術式は広範子宮全摘術が 18 名 (42.9%) と最も多く、次いで準広範子宮全摘術 16 名 (38.1%) だった。術後合併症は有りが 31 名 (73.8%) と半数以上が自覚し、その内容は、排尿・排泄障害が最も多かった。また入院中に化学療法を行い退院した対象者は、倦怠感、末梢神経障害症状を有していた。

研究の同意を得られた婦人科がん術後患者 42 名のうち無作為抽出し、非対称群 20 名、対照群 22 名だった。途中体調不良や、治療中断などで通院場所変更などにより Dropout した対象者があり、結果、分析対象は、非対称群 16 名、対照群 17 名をとった。

対照群のフォローアップ相談は、回数は平均 3.2 回、平均時間は 20.8 分だった。相談内容は排尿障害が一番多く、次いで性機能障害、下肢浮腫だった。その他、合併症以外の内容は今後の治療への不安、経済的問題、就労困難などの相談があった。

- ・ 排泄障害の尿失禁に対して  
症状を訴える対象者は、術式別において、広範子宮全摘患者が多かった。症状を有する対象者に対し、機能的改善を目指し、尿失禁に有効とされている骨盤底筋運動の指導を実施した。しかし、広範子宮全摘患者、化学療法の複数受療者、放射線治療受療者の多くは、「うまくできない」と話し、著明な改善効果は得ら

れなかった。

また、当初、骨盤底筋運動の効果が得られた対象者に対し、骨盤底筋運動の指導前後で数値的評価を予定し、残尿測定を用いたが、「(失禁は)尿もれの量自体は以前とそんなに変わらない」と測定実施には至らなかった。

その他、骨盤底筋運動の指導以外に、膀胱炎予防として飲水の促し、尿失禁に使用する用具の説明、症状の悪化傾向の対象者には、医師へ情報提供し、医療的対応を受けた。

・ 性機能障害に対して

性機能障害の相談は、20～40歳代の対象者が占めた。「化学療法後すぐにパートナーから、性行為を求められる。だるいのになそのような気分じゃない」「白血球数の低下時に性行為は可能か」「放射線治療後、どのくらいで性交渉が可能になるのか」と性交渉に関する相談内容が多かった。治療により粘膜障害、骨髄抑制による易感染の危険性、性交時痛の出現を説明し、パートナーとのコミュニケーションの重要性と再構築をあわせて説明した。また、対象者より性交渉開始時期について、医師に直接尋ねにくいと相談され、研究者から医師へ伝え、説明された。

・ 下肢浮腫に対して

侵襲度の高い術式を受けた患者は早期から下肢浮腫出現に対し強い不安を抱いていた。フォローアップ相談時に毎回触診をし、浮腫の出現の有無、自覚症状を確認した。また、同時にリンパ浮腫指導の研修を受けた専任の看護師と連携し情報提供を行った。症状が出現した対象者に対しては、リンパ浮腫の専任看護師より、弾性着衣、弾性包帯による圧迫、圧迫下の運動、手動的リンパドレナージ、患肢のスキンケア、体重管理等のセルフケア指導等が行われた。

・ 経済的不安に対して

手術後、長期間にわたる複数回の化学療法を受療する患者より、就労を継続しながらの治療をすることへの不安、休みが取りにくい等の相談内容があった。がん腫と治療内容にもよるが、概ね約6ヶ月間実施される治療と、治療費、加えて治療日前後に通院するための勤務日の調整が大きな負担となっていることが話された。相談内容の経済的な面では、使用可能な社会保障や制度などの情報提供を行った。また、より詳細な情報を

必要としている対象者には、がん相談支援センターへの紹介を行った。ここでは、就労に関し社会保険労務士との個人面談が継続して行われた。

・ 今後の治療への不安に対して

化学療法の効果、放射線療法に生じる粘膜障害や排便障害などへ不安を抱く対象者が多くいた。話される内容を分析すると、治療内容が十分に理解・把握されていないことによるものが原因と考えられた。医師と情報を共有し、医師からの再説明と、理解の確認を行った。理解困難な対象者には、パンフレット等を用い説明を工夫し理解されるよう務めた。

・ 不安感・抑うつ感に対して

不安・抑うつ尺度にて、臨床的に要観察を必要とする患者に対して、注意深く関わった。その対象者は進行度や術式の侵襲が高く、化学療法の副作用への不安に対し恐怖を抱いていた。その都度話される、話を丁寧に伺い、パンフレットを用いて副作用の出現時期の説明と対策や、本人の嗜好を取り入れた気分転換等の提案を行った。対象者の気分の落ち込みの悪化、通院・治療拒否等はなかった。また、希望者にはソーシャルサポートネットワークのツールとして、同病者の語りの場「がんサロンの紹介」を行った。

・ 効果検証の分析結果

ベースラインのFACT-G 合計得点は、他がん腫と比較し大きな差はなく、HADS 得点は、不安と抑うつはほとんどが問題なしだったが、臨床的に明確な苦悩を有しているものも僅かにいた。

分布を確認し、ベースラインと6ヶ月後のFACT-G 及び、HADS の t 検定を実施した(表)。

表 FACT-G と HADS 得点の非介入群、介入群の

		t 検定結果				N=33	
		非介入 (n=16)		介入 (n=17)			
		前	後	前	後		
FACT-G	身体	AV	18.0	18.3	18.7	18.3	
		SG	6.6	7.0	7.7	8.1	
	家族	AV	15.9	16.1	18.1	18.9	*
		SG	6.9	6.6	4.1	3.9	
	機能	AV	15.9	16.3	16.9	18.0	
		SG	6.9	6.9	6.0	5.4	
	心理	AV	18.4	18.1	20.8	20.5	
		SG	5.2	5.9	6.2	6.5	
	合計	AV	68.1	68.8	74.5	76.6	
		SG	14.4	15.1	19.4	19.4	
HADS	不安	AV	5.7	5.4	3.6	2.4	*
		SG	5.3	4.4	5.4	3.7	
	抑うつ	AV	2.9	2.5	2.5	2.4	
		SG	3.2	3.4	3.2	3.1	

\* p<0.05

QOL、FACT-G 尺度において非介入群、介入群の前後の総合得点を比較した。介入群の FACT-G の下位尺度、家族・社会 (p<0.05) と、HADS の不安項目 (p<0.05) に有意差が認められた。

FACT-G 合計得点は、非介入、介入とも有意差は認められなかったが、概ね得点が高く (QOL が高い) 推移していた。

HADS 得点は不安、抑うつ共に得点は高くなく、不安・抑うつ傾向の軽減を示していた。これは、化学療法や放射線療法などの治療に伴う副作用・合併症の不安や対応に対し、経時的に副作用等へのセルフケア能力の向上が伴ったこと、術後、化学療法等の補助療法受療への納得、社会生活への適応などが身体面、機能面、そして精神面に影響したと考えられる。

以上のことより、身体・心理・社会的障壁を改善し生活への再適応を促進する看護支援を検討することを目的としたフォローアップは一定の効果が認められた。

しかし、調査対象者の該当者が少なく、及び Dropout 数も予想以上にあった患者の身体面や機能面への著明効果は得

られなかった。

患者の多くは合併症や不安を抱えているなか、症状改善に対する研究は少なくフォローアップ相談内容の改良及び、婦人科がん術後患者特有の課題や症状に特化した介入研究が必要であると考えられた。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

井上水絵、婦人科がん術後患者の外来フォローアップ相談に向けた文献検討 ~ 術後のフォローアップに関する和文献検討 ~、日本がん看護学会誌、査読有り、30 巻、(2016)、47-54

[学会発表](計1件)

井上水絵、初発婦人科がん術後患者の初回外来時の QOL と抑うつの実態、第 31 回日本がん看護学会学術集会 (2017) 高知

[図書](0件)

[産業財産権](0件)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

井上 水絵 (INOUE, Mizue)  
福島県立医科大学看護学部・講師  
研究者番号: 20582571